

翻刻 『尊氏將軍二代鑑』(中)

翻刻の会

一、底本を忠実に翻刻することを原則としたが、次のような校訂方針に拠った。

- 1 本文は文字譜を手掛かりにして、適宜改行を施した。ただし、道行・景事の類等では改行しなかった。
- 2 各丁の表・裏の終わりは、丁数の数字とオ・ウの略号を()で示した。
- 3 仮名は現行の字体に統一した。ただし、感動詞、送り仮名、捨て仮名の類以外の、本文中の「ニ」「ハ」「ミ」は「に」「は」「み」とした。

4 漢字は、一部の異体字を除いては、原則として通行の字体に統一した。

5 漢字・仮名ともに、誤字、脱字、当て字、仮名遣い、清濁は底本の通りとした。

6 特殊な略体、草体、合字等は現行の表記に改めた。

7 畳字は、平仮名は「ヽ」、片仮名は「ㇿ」、漢字は「々」に統一した。ただし、「く」はそのまま残した。

8 文字譜の類はすべて採用し、本文の右傍の適切と思われる位置に翻字した。

9 底本の不明箇所は適宜同板の他本で補ったが、特に断らなかつた。

二、本文の翻刻は、次に掲げる翻刻の会(学部学生の研究会)の会員によってなされた。

佐野絵理、鈴木統太郎、戸川郁子、長村祥知、前田樹里

文字譜、改行、本文の最終確認は山田和人が担当した。

直義いかゞ思ひけん。太刀投捨てあきれ顔。フウ、さすがは師直のおとしく。切り捨て云詞を聞。只一人支てかゝる行跡。ホ、フ頼もしし勇有。其性根を見るからは病氣の子細語らんと。いふに師直ハ、ハツト頭をさぐれば。直義は人に聞せぬ大事ぞと。測辺(三十三才)にあたりを守らせて。心を配り小声に成り。我先將軍尊氏の舍弟として。大塔の宮を擽にし。それ成ル測辺に首打せ。軍を静めし艱難も將軍職を繼ん為。然るに嫡子なればとて。甥の義詮將軍職に任せらる。所詮謀反と思へ共むつかしきは西国のおさへ。塩治判官高貞は。中々随ふ者ならず。彼が妻の貞姫に。右大臣具親公心をかけて頼むを幸イ。將軍職の御綱旨を申下して賜らは。貞よをうばひ參らせんと。契約なして其折から。石打にことをよせ。うばひとらんと思ひしに。しそんじて是迄延引。此春義詮十五になれば。(三十三ウ) かれは都のしゆごと成り。我鎌倉へ下つてはことをなす共及ぶまじ。何とぞ塩治をむほんとざんそうし。貞よをさへうばひなば。將軍職に成ルべきかとやせんかくやと心を屈し。臥まどろみたる或夜の夢。大塔の宮が首。我ガ膝節にくひ付くと。思へば覺て右の膝。眼耳鼻舌唇そなはりて。伝へ聞たる人面瘡。食をはみ声を聞キ。我計には詞もかはし。眼を見合すれば。怒れる面。熱氣を吹きて五体をやき。我身ながらも我レを責。医療薬も有べけれど。かゝる難病。五体不具と人にしられれば本意の妨ケ。他言すまじき性根(三十四才)を見て。密に是を語らん為。討捨とは謀。我大望と此難病。汝悉く判断せよと。聞クもあやしき詞の末。師直暫く工夫の体。御むほんは先指置キ。太切は御身の上。人に対面なきからは。御難病とさつせし故。先達て某けらい榎原藤内に申付ケ。難病異病に驗有ル。明医を尋候へば。不日ツに伴ひ来るは治定。世上にさたなく御平安。宜はからひ申スべしと。いふに直義なを打解。天晴忠臣測辺もいこんを残すべからず。かくとしらで此年月。心を置く悔しさ

よ。汝（地色中）にいかでつゝむべき。かゝる異病（い）をよく見しれと。兩人を近く（三十四五）よせ。腰（ウ）かけながら唐綾（ウ）の。裾（ウ）引上（ウ）クレ
ば右（ウ）の膝（ヒザ）。靈々（レウ）たる人面瘡（ヒトオモ）。口を動かし眼（メ）をてらしあたりを見廻（メグル）す輔車（ボ）。奇異（キイ）の病（イ）を目の前に身（ミ）の毛（モ）も。よだつ計也。
直義（地ハル）我と貞見合（セ）せ。何を聞てや声（セ）あらゝげ。ヤアおろか也大塔（トウ）の宮。敵なれば直義が。將軍職の望を妨（サマシ）ケ。とり殺（コロ）さんとは
いつかな。生（シヤウ）ある時さへ某に。擒（トリ）と成（ナリ）て亡（ナシ）ぼさる。まして此世になき靈魂（レイ）。大丈夫の身にやどり。命をたつこと思
ひもよらず。きつくはい成（ナリ）ル頼魂（タモ）イ。にらみひしいでくれんずと。はつたとねめたる眼力（ガンリキ）に。膝（ヒザ）ぶし動（ウゴ）き忽（イカ）れるこゝち。く
はつと見出す眼（メ）の光（ヒカリ）リ。にらみかへ（三十五オ）せはねめ戻（モド）し。面をならべ頭（カビ）ラを重ね。よりては開（ヒラ）き退（ヒ）ばそひ。うめきた
けるは獅子身蟲（シシコ）。蝸牛（ナツメ）の角の争（アワ）ひと。両頭大蛇（リョウダウ）の勢（イキ）ひを。合（フシ）せて見るもかくやらん。スハ又御病氣起（オ）りしと。二人はあは
てさはげ共何（ウ）とはからふかたもなく。病（ヤマ）はつのる熱氣（ネツキ）の息。火煙（カ）のごとく吹（フ）かけられ。さすがの直義（地ハル）たまりかね。あら
くるしやとどうどふし。大熱（ウ）しきりになりければ。例（レ）の測辺（ソクヘン）が心へて。四方（ハル）のしやうじをさし廻（ウ）し。兩人共（フシ）に守りゐる。
折（地色フ）からあない白砂（シラス）の庭。師直（ウ）けらしいの榎原藤内（エノハラフジノウチ）。主人に直談（ジキタン）申（マ）したしと。聞（ハル）より出る武蔵ノ守。ヤア藤内（フジノウチ）。申（マ）し付（ツ）けしはいか
にぞとはや問（ト）（三十五ウ）かくれば。さん候宇治（ウヂ）の里のかた辺（ヘ）。和氣（ワケ）の佐仲（サナカ）と申（マ）ス者。難病（ナン）異病（イ）に妙有（メウ）ル由。密（ヒソ）に召連候（メシツレ）
へ共。一向（カウ）やぶ医（イ）に候へば。御前（ミゼミ）へいかゞといふを引取り。汝医（イ）は意也と云ことを。位（クワイ）の位（ミ）と思ふかや。仁愛療治（ニンアイリョウヂ）の意也。
やぶ医とてあなどるべからず。それくと請（シヨウ）ずれば。三十計（ミソジ）の。茶筌（チャセン）髪（ガミ）。短（ミ）きあひくちさすが猶（ナ）人にすくれし医意（イ）の。
座（ザ）に付（ツ）礼儀厚小袖（レキギアツコ）。乗（ノ）り物医者（モノイシヤ）もやぶ医者（イシヤ）も。羽織（ハオリ）は長く極りぬ。師直（地ハル）頓（ト）而（ニ）詞（ジ）をかけ。ム、和氣（ワケ）の佐仲（サナカ）とは御辺（ミヘ）よな。明
医（イ）たるよし藤内（フジノウチ）が物語（モノガタリ）り。願（ネガ）くは相伝（サウデン）由緒（ユイ）。聞（ハル）かまほしやと尋れば。御尤（ミヨウ）の御詞。由緒と申して某（ミ）は。元（ゲン）（三十六オ）来医（イ）

家の生れにあらず。武家に育て其以前。所領もけがし候へ共。子細有て流浪の折から。和氣の伴良と申ス老医。相果年久敷ク。後家育の娘有り。縁を求て入り贅し。伴良が家伝の秘書。聰病イ唾聾。腹にて物をいふ病イ。乱心病人面瘡。其外彼是十難病。相伝を逐て後。後家も程なく空敷成ル。秘書の病イの内ならば其妙を多たれ共。我レ人かくすは難ン病。他言せましき誓言はヒ冥利。御物語りといふに師直便りを得。主人の大病は人面瘡。大塔の宮の執念と。御心の付クが病イ。配劑頼むと。聞クより佐中近くさしより。懼りには(三十六ウ)候へ共。人の執着とは御迷ひ。七情感じて身を破り。百病は氣より起る。人面瘡のきざす時思ひなしの初一念。弥其身を苦めて。火煙のごとき執氣有り。直義公の御病氣に。卒爾のこをすべきかと。御疑ひも有べければ。家伝の秘事を明すべし。千手陀羅尼を以て病人の迷ひをはらさせ。人面瘡の嫌へる薬り。貝母一味を無体にはませ。目鼻耳にも是をぬり。内薬にも用ひなば。忽チ験候と。手に握りたる匕の妙ヲ、大慶く。よくこそ大事を明されたれ。早く療治の用意をと伴ひへ内に入にけり。

かくと様子はしらね共書院玄(三十七オ)関に詰し人。師直佐中か帰らぬは扱は御前へお免しか。我もお目見申さんと先キへ飛たる弓大将。猪股瀬平と云声に測辺は頓而支り出。師直佐中を御免とは執權職と明医の徳。外に対面ならぬこと。首きらるゝが望みかと。いはれて進む心なく。筈をちがへし弓頭ヲ。矢庭に逃て立帰る。

身共はぜひにとくる法橋。典薬ノ頭としてやぶ医者ふぜいに見かへられ。是は近比一生の。浮沈連数の脈計直々に見申したい。お頼申スの詞の内。いやく貴殿はなを御遠慮。人にしらせぬ御病氣を。なをすはやぶにも功の者。あなどりめさるゝ御自分の(三十七ウ)首は殊更あぶなしと。聞いてがつくり御手医者も。主と病イにかたれぬとつぶやきかへる。其跡

に。しとく歩む足輕大将。とかく主人に大目付ケ。奏者銀役藏奉行。入かはりてのお見舞もゆるさぬ御意を戴て。詞するとき伊賀ノ守。命がないと云い放せば。皆々手討チは嫌ひにて。そばへもよらず出て行ク。

じこくうつりて武藏ノ守。佐中を伴ひ立出レは。直義漸快く。ゆうくと歩み出。佐中が医術言語にたへたり。誠に思へ

ば迷ひにて。氣をやみ痛を發せしに。一味の薬りに人面瘡。口を閉眼喩。耳鼻共に平ぎしは。神変ふしぎの医療也と。

感心すれば師直測辺。天晴手がらと(三十八才)もてはやされ。笑をふくみて頭を持上ケ。某が流儀には。即功有ルこと珍

らしからず。吉田と申ス高騎が娘廐の祈祷にきよじ有て。顔にはびこる瘤を生じ其中に音をなす。猿の見入レとする故に請

合て是を治す。其外十氏の何某は。茄子を踏で病いと成り。醒井氏は蛇盃の病イ。各武士とは云いながら。元億病のなす所。

是又一ケの伝有て本シ復させて候へ共。或は貴き人にもあらず。又は病イを隠す故某が名は出ず。されど余の人千万人の

本シ復より。直義公の御快氣は。家の褒身の冥加と。悦ふ儘の手柄咄シ。直義しぶく打うなづき。ヨ、聞ケは聞程奇妙

く。いざ先(三十八才)当座の返礼せん。ヤア師直。弥最前云い通り。佐中をよつくもてなすへし。我長居は嘸退屈。

奥へ行んとめくばせし。測辺をつれて入りにけり。

師直頓而立上り。ヤアくけらい共。用意能クは出来れと。いふより早くとり手の役人。魚鱗にならんでかけ出たり。佐中

は見るよりいぶかしく。飛しさつて身をかため。ヤアラ心へぬ師直。各拙者を取り巻ク体。人たがへか当座の意趣か。身に

取て覚なし。何ごと成ルやと尋れば。イヤサ主人の御意を聞ずや。汝が療治を感心有リ。能もてなせとの御こと。我やしき

へ連帰。あらみの刀の塩梅見せ。きみのよい馳走せん。ソレのがすなと声かくれば。とつた(三十九才)取たとよる所を

ひつばづして腕捻かひなむぢ。反そつて投のけけとばして。あたりを払はらて見へける所に。思ウひもやらぬ後うしろより。師直ハルしつかと抱だきとむれば。手取り足取りたゝきふせ。コレ卒つひになはをぞかけにける。

佐中地色中はとがの覺もなく。五尺のからだに三寸なは。かゝる無法は何ごとゝ。じだんだふんで無念スエテの体。けころしてくれんず

と。なは取り引立色つゝとより。ヤア思詞しらずの師直。將軍の御叔父君。御難病なをを直せし某。却かへつて而命をとらんとは何ウシの誤あやま

り何のあた。子細ウを聞んといはせも果色ず。イヤ其詞くだらぬ。直義公の御難病。他言せじとのせいごんは。汝虚言きよごんのせ

うこ有地ウり。一つには御難病を聞クやいなや。かく立しるチ所に驗有ル。 (三十九ウ) 家伝かへんの秘事ひじを打明あかす。二詞つに諸方の手柄咄シ。

かくす病イも云ちらす。三地ウつには主君の本ウ復を。家の褒はまれと云詞。汝が誤り主人のあた。生置いけては為中ならず。身がやしき

へ連帰つれり。密ひそかに首を打テとの御意色。但誓言詞に偽りなき。云いわけあるやと詰かけられ。サアそれは。サアなんと。サアく

なんとゝきめ付ケられ。ハツト計中に行フシキつまり。とかふの詞なかりけり。

師直猶地色ハルもたるみなく。汝色もいぜんは武士と聞ク。佐々木が藤戸の先陣せんじんは。塩焼しほやきの藤大夫が情。却而後日の聞へを憚はづかり。命地中

をたゝれし例有地色ハルり。異議に及あひば、親類共しんるいに命のさはり。ぜひなきこと、明あきらめて (四十オ) 神妙しんぼうに覺悟かくごせよと。のつびきさ

せぬ網の魚。のがれぬ所ウと顔色ふり上上ケ。ハツア世に。恐地色ハルウるべきは過去くはこの因縁いんえん。某幼少詞の時よりも。弓箭きうせんにかゝる相有さうりと云い

しにたがはず。思地色ひもふけぬ疑ウひ受受ケ。理りの外の理ハルにせまり。三寸の舌故に百手の身ウを誤あやまる。是過去よりの因果いんぐゑぞと。思フシ

へば恨む人もなし。

覺悟地中の上に一つの願ハルひ聞てたべ。家に残せし女房は親の敵をねらふ者。我過あやまちは露しらねば。かれが命は助かるやう。必御地色中ウ

自分頼むぞと。しに、行ク身はさし置キテ。義理有ル妻を頼み置ク。心の内ぞせひもなき。ヲけなげなる覚悟。妻の命にさはりなし。時刻うつ（四十ウ）るいざ立ちめさと。さいごを急く隙の駒。ひづめとなりし露の身のあはれはかなくむざんさよ。

すでに引立テ行ク所へ。取り次の武士罷り出。師直殿に急御用と。女一人あはた、しくは是へ通り候と。詞にそふてくる女師直さとくさし心へ。佐中を家来が後に立テ。何者成ルぞと尋ぬれば。女は近く畏り。扱はお前が師直様。わらは、侍従と申て。

和氣の佐中が女房けさあかつきお前の御けらい。夫佐中をつれ参られし。るすの間に何とやら胸さはぎしきりにやまず。日はかたむけ共帰られず。あんまりの氣遣いさ。夫の迎ひに参りし所師直様も我夫も。此御やしきにと承（四十一才）はりお見知りもなきわたしが。御前へ直に急用とは。是へ通りて断。申シ。佐中をつれて帰らん為。早ふあはして給はれと。いふに夫が心も動き。立覆はれし後より。覗くとしらず女房は。胸のだくく勝ちける。

師直態そしらぬ体。いかにも佐中は今朝より。療用有て相勤メ立帰りしはまだ間もなし。定て道のちがひつらん急ぎ私宅へ帰るべしと。誠にやかに云い廻され頼而落付ク女心。ヤレ嬉しや／＼もふ帰られましたか。そふとはしらず御前迄。無礼の程は御ゆるしもふお暇と立ッ所に。女房待テと佐中が声。見れば夫は高手小手。コハそもいかにとよる所を師直早く立（四十一ウ）隔り。ヤア未練なり佐中。女房に対面してなんの用。もし科の子細を語りなば女房迄も命がない。女も様子聞ッならば弥佐中が為にならず。今もくぜんに命を取ル。此ま、帰るか夫をきらふか。様子をいふて女を殺すか。返答次第と双方へ詞の釘のするどさに。女房様子はしらね共聞てせつなく見て悲しく。とふもとはれずせ付ず。のふどうよくな我夫

を。助けてたべあはせてたべ。是のふくと計にて。それといはれぬ涙川くちなしいろにやながるらん。

夫も心はきゆれ共さあらぬ体に詞をしづめ。ナフ師直殿。(四十二才) 某あやまちあればこそ得心して此行跡。妻の命にさ

はるとしつていかで子細を申すべき。外に一言いふこと有り。いざあはされよといふにうなづき。ヲ、其詞聞ん為暫くの間

は免すべし。対面せよと引合す。女房頓而走りより只ことならぬ胸さはぎに。かけ付けしかひもなく此ふぜいは何ごとぞ。

どのやうになと云いわけして。助かつて下されと。すがりては泣き立てはなき。身をもがき氣をあせり。かこち嘆くぞ道理

成ル。

佐中も共に涙をうかめ。我思はさる越度をなし。かく四人にならんより切り死するも合点ながら。其方が身のうへ(四十二

ウ)には親の敵を討ツ望有り。叶はぬことに刃向ひなばそち共に命がない。かくあさましき有さまにむざくと成り果て。せ

めておことをかばひしぞや。

必命全ふして年来ねらふ敵をうてよ。科の子細を問とても。いへばいふ程つみ重く。ふうふ共に眼前に命を取ルとのことな

れば。我心ざしが無足する前世の因果と明らかに。只此まゝに立ちかへれ。いふべきことは是計。女房さらばと云はなせど。

心はつきぬ夫婦のなごり。かくご極めし其上の涙は。止るかたもなし。

女房いとゝむせび上ケ。ナフ此儘にかへれとは。心づよいどうよくな。とがの子細は何ごと。尋ることさへならずして。

どう明らめ(四十三才)ていなれふぞ。とがは問まい師直様。夫を助けてゆるしてと。せき上くなきさけぶ心ぞ。思ひや

られける。

かくては果じと武蔵ノ守。情なくも引キはなし。それ引ッ立よと呵責の声。すき間をくゞつて又取付キ。いや／＼いか成ルと有共。夫は殺さぬやりはせぬ。我をも一所につれて行ケ。はなれじ物と取すがり。引きはなされては又取付キ。もだへこがる、あはれさを。見るさへ心消て行ク。下部が足もよりはり果。始メて涙師直も共に袖をぞしほりける。

一ノ間に聞て伊賀ノ守。ヤア／＼佐中。汝がかくごを感じ有り。女房は助けよと改めて御説也。然らば心は残らぬ所。女をやらば未練の基。我に任せとつゝとより小腕取ッて(四十三ウ)もき放し。しつかととらへて動せず。サア／＼師直。じやまはこつちへ引たくる。いざ帰られよいざさらばと。互に礼儀こなたは欺き。我身も共にとさけべ共。其かひさらにあら男飛がごとくに行キ過る。

今は影さへ泣キしづみ。さかのぼる氣を押しづめ。測辺がゆだんの刀を抜取リ。はつしとうてばかいくゞり。驚く間に身がまへし。大事の夫の命のきは。見届いでなんとせふ。留達せば切り捨て。太刀ひらめかし行んとす。さしつたりと拔放し先キにすゝむけらいが刀。腕諸共打おとせば。ソリヤ切たはとさはぐ内。其太刀取て二刀のはやわぎ。思ひ切つたる勢ひに。測辺が打ッを左りに受。けらいは右キに打合せ。刃は一度に(四十四オ)氷柱のごとく。打ば開きかくればなぐり。心を賦つて切り合しは危かりけるへ次第也。

女ながらも念力に。多勢をくだく太刀の風四方へばつとおつちらし暫く息をぞつぎあたる。

かくと見るより伊賀ノ守。ヤアけらい共。女が働き手ひびき故切り結んだはせふことなく。生捕にしてとゞめよと仰を受けてこりもせず。命の突棒乳切木取り。おつ取り巻クをこと共せず。弓手に切り付妻手になぎ。左右の刃きらめきて流星電光め

つた切り。手負手疵は数しれず。打はらはれてたまりかね皆ちりぐに逃去たり。

もはや追手の人もなく心安しと胸押しづめ。夫の敵は高の師直。イテ追(四十四ウ)付んとかけ出しが。はや程遠く隔れば。急ぐとすれどかひあらじ。おくへかけ込直義に。いとしい夫の命乞直に頼んでもかくもと。かけ戻りしがイ、ヤイヤ。女はかゝる狼籍者とよもやそばへはよせ付ケじ。只師直に追付て。夫をうばふか敵を取ルか。二つに一つと心を定メ。女心も中々に弱を己が力足。どう。く。どうくくとふみしめ。ふみ付ケふみかため。雪の足なみかけ出る。形は一身刃は二刀。ふうふの玉しひ行合ば。取りかへさいでおくべきか。夫をかへせつまもどせと。涙もかみもはらくく腹立やうらめしと。一念一心二トすちにとぶがごとくにおつかくる心の。うちぞいさぎよき(四十五オ)

第三

名も清き水のまにく。尋れば。滝の音羽の山桜。霞のごとく雲に似て。世に咲ク花の有ル故に。都も鄙もおしなへて人の心ぞ長閑なる。詠めは広く。春の幕。打むれ出る袖の音。中に匂ひも目も留るやんごとなき女臍は。塩冶判官高貞の妻。貞御前の立ち姿。柳が枝の花盛り。一木くによすらへば。桜も恥るふぜい也。

花に心をつきぐの女中方に打向ひ。連合イ塩冶殿は奥の院へ御参詣。自ラにも山路をひろへと。すゝめられての桜がり。咲クも盛りも(四十五ウ)散しほも。恋の思ひになぞらへし花の姿のやさしやと。目もはなれず見給へば。三筋の滝のいとしげく行キつへ戻りつ身を碎。是ぞ女の占ひさん和らかな身の荒行は。人目にとまる染浴衣。ひたぐひつたり打れてぞ。玉ちる計いたくし。

矢立地色中の筆に櫛ウのは。かくとしらせる声高々色。サア詞く奇妙きめうの女占方うらかた。法花経を櫛しきみに書写しよしやし。八卷くはんを八卦けになぞらへ。廿八品はんは星ほしにたとへ。毎日毎朝ごう三十三度。観音地ハルさまの滝つに打れ。ひいやりとした功を積つみ。水鏡ウより見通みとおしの。占フシひさんとふれありく。貞地色中よ御前は聞ウクよりも。ナフ珍らしい女占方。皆の身の上思ふこと。占うらなはせ慰ウんこ、へくと（四十六オ）召中るれば。アイトこたへて占ウひさん。来る間程なく腰元衆。サアわたしからおれからと。せりあふ先へ小篋おざがさし出色。わしが生ねれは子の年七つ違ちがひの殿御とは。ちいさい時から云ウイ名付。宮仕みやつかへのお暇いとまうけ。めうとに成ての吉凶よしあしを。よう占ウふて下さんせ。ハツア是はむつかしい。子の年は鼠也七ツちがひは午むまの年。馬地中と鼠の相性あひしやうはどふ考かんがへてもなんぎ物。よしになされと占ウへば。そばに待兼衣手が。わしや云ウイ名付はござんせぬ。どんな殿御に相性を手の筋で見て下色さんせ。ヲ、尋常じんじやうなつまはづれ。手の筋はマア百握ひゃくにぎり。握地中つた印ウシが有ルからは忍しのんで殿御が有ル筈と。口ウに出次第いひ次第。（四十六ウ）あふたがふしぎ腰元衆。皆々フシかんじ入りにける。貞地色中よも近く立色より給フシひ。自詞ラは我身より連合ひそかイの御身の上。密ひそかに占うらなひとふこと有り。皆地中の衆はしばしの間子安こやすの塔たうから朝倉あさくら堂だう。奥の院へも参ウつておじや。塩冶殿の御尋ウあらば。しらせてたもと仰ウに任せ。花見がてらに女中方にょちう皆打ウへつれて出て行く。貞地ハルよはしたふ忍ウび夫占ぶまはせんの下心。女も今は何とやら様子有ウりげに見廻して。貞色よ御前のそばへより。塩冶様はしらね共お前のことは見へすきます。御存シのない一大事。真実しんじつを申シましょ。マアこな様は酉とりの年。しかも年弱師走の廿五日生れ。幼名おななはしの、め様。元大納言のお子とは（四十七オ）偽いつはり。ほんぼんの親達もわしばつかりは知してゐると。聞地ハルクにあやしき詞ウの先キ。コレまちやく。しの、めと云前の名。生れ日迄よう知て。通兼様の子でないとは。ハツア思ひ当みちかることも有り。

禁庭より自らを塩冶殿へ賜る時。右大臣具親公貞よ姫は誰共知ぬ。賤しい者にもらひし子と。讒奏ありしことも有り。そんなこと迄見通しとは。余りふしぎで恐ろしい。とはいへ外に真実の親達が有ることか。しらせてたもとの給へば。ナフ親達のなき故に。独り便りもなき身の上。侍従と云て外ならぬ。血を分しそなたの姉と。いふに貞よは驚け共。イヤいぶかしと心を静め。ヤイこゝな慮外者。慥な(四十七ウ)せうこもあらずして。鹿相をいはゆるさぬと。詞はつよくさし足に。尋ね給ふぞことはりなる。

侍従は涙をうかへしが。いかにも合点のいかぬことはり。そなたやわしが親と云。代々勸勤の家筋。和氣の伴良といひし人。庸医者と成り果自らが三ツの時。大納言通兼卿の御台様か小産なされ。取りかへ子を尋る折から。そもじが生れし初声を御けらい衆が表に聞付ケ。大納言へもらはせ給ひ。其時はしのゝめなれば直に名に付ケ給ふぞと。母様の御教。たとへめぐりあふとても。兄弟のなのりは無用去ながら。もし一大事有らば。和氣の家の大事の秘法。一生疱瘡せぬ(四十八オ)守を妹が肌にあへたればそれをせうこに名乗あへと。わらはにも賜りて肌を放さぬ此守り。覚はないかといふ内も思ひあたれば貞よ姫。肌の守りを取り出し。共にくらぶる裏書は伴良と有る筆のあと。見合せ見合す目に涙。ナフ姉様か。妹かと。互に手を取り立つるつ。顔改めて詠め合イ。人めをつゝみ声かくす。涙の雨は兄弟の。縁のつなをや伝ふらん。

塩冶判官高貞は思ふ子細の有る故に。おくの院にけらいを残し。出くる道にかくと見て。コハ心へずとさしひかへ。幕の内にぞ窺ひある。

貞よは礼義の襟つくるひ。姉様よう名乗つて下さんした。水子の時に別れたる父和氣の伴良(四十八ウ)さま。母様共に

お顔もしらず。お果なされしことならばお前が直に親同前。今の咄に気がゝりは。一大事有ル時に名乗リするとは氣遣はし。
我身に叶ふことならば共になんぎを救いたし。聞させ給へと。問ければ。ヲ頼もしい忝い。此侍従が七ツの比。父和氣の伴
良様。夜中に療治の帰るさ。大納言通兼卿のけらい。近藤太郎と云若侍。父上を討て立チのき。うき年月を重ねつゝ。去年
の春佐中と云人を夫に持チ。其後母様もお果なされ。夫ト独りを便りにして敵を討んと思ひしに。此比何のとが共しれず。
夫の佐中を師直がからめ取り。首を打とのこと故にさまぐと命乞。ナフ思ひもよらぬ師直が(四十九才)願ひ。塩冶が妻
の貞よ姫に日比心をかけし故。文を以てくどきしに小夜衣と計の返事。其方貞よに近付テうばふて来るかさもななくば。なび
くと云返事を見せよ。佐中が命助んと聞クよりハツト思ひしが。母様の遺言を思ひ出し。姿を襲してけふの対面。同道す
るは叶はぬこと。心に染ずと嬉しがると一筆が千万銀。命を求る宝ぞや。

有ルまじきことながら聞取てたべ貞よ姫。夫の命を助けてと頼む。心のわりなさよ。

貞よはいかが思ひけんつゝと立てコレ姉様。重ねて別に御対面。マアけふはおさらばと。言すて行ク所を走りかゝつて引
とぐめ。頼むことには返事もなく。ふり切ッ(四十九ウ)て行クそなたの心。塩冶様へ義理立ねば。文かくことはせぬ氣じ
やの。ヲ、道理くみんな此侍従が無理。夫にさへ今迄も妹有とはいはざりしに。よしなき今の名乗ごと。誤りました頼
むまい。妹さらばといふよりはやく守刀を抜放しじがいと見へしを取りすがり。なふ姉様待てたべたつた一言云いわけをと。
いへ共いとゝかくこの詞。夫の為とは云いながら悪きを呵姉が身で。邪頼む面目なさ。とはいへ此恋叶はねば夫は忽チ殺
さるゝ。生てかひなき我命はなして殺してたもの。既に突込九寸五分。悲しや待つてと猶すがり。必死で下さんすな。

成ル(五十才)程文をかきませふヤアそれは真実か。なんの偽りいひましよと。聞て心の蘇り。ナフ嬉しや貞よ姫。姉が詞を立て給ふは敵を討ッ便りと云イ。夫婦の者が命の親。コレ手を合す妹と悦ぶふぜいを見るよりも。貞よは涙にむせびしが。誠の親を知らるは姉様のお影故。いなといはれぬ恋の文塩冶殿へは云いわけして。ともかくも成べきが。真実契りをかしたる夫は外にと云イ残す。詞の内に驚く侍従。何外に夫とは大それたこと計。ソリヤまあどふじや妹と。さすが血筋の誠より氣遣イはれず問かくる。

今は何をかつ、むべき。三年以前五節の舞の退の折から。衛士の(五十ウ)源次郎康綱と云人に。忍ひあふて契りをかはし。其後密に尋ねても康綱殿の行衛はしれず。いとと思ひの夜はも多。昼は消つ、恋しきに。勅定はぜひもなく。塩冶殿の妻と成り。心の内を打明かし今に一夜の枕もかはさず。ナフおと、ひのくれかた。庭の林へ師直が文を投込。返しをせずば塩冶殿のお為にならぬ文体故。小夜衣と返事せしは。康綱と云夫ならで。夫は重ねぬ下心。思ひまはせば塩冶殿へそら恐ろしく恥かしき。とても我身はながらへてせんなき命。せめて姉様御ふうふの命を救ひ参らせんと。心にあらぬなびきの文。いかで貞女のた、う紙。(五十一才)胸にやたての筆取りて。手はふるへ共うるはしく。君に随ふ玉章の魂いこ、にきゆれ共。嬉しく思ひ参らせとかく我ながら恨しや。あふ夜ヲ待ッとは悲しきに。めでたくかしくと筆にさへ。羊のあゆみ書とめ。物をもいはず前に置き。また、きもせず身ぶるひし。泣き顔かくせど目の内を。めぐる涙の潮さして。鳴戸の渦のごとく也。

姉は悦び又氣ノ毒。妹の心思ひやり文を手になへ取りかねて。兄弟共にかこち泣きさしうつむきし折からに。山風さつと吹来

り。桜^{ハル}まじりに恋^ウの文。ハットちるとは露^ウしらず。正体涙^ウにくれける所へ。腰元^{おぎ}小笹^{ささ}立^{ハル}帰り。ハア是^コにござります。奥の院へ参^{ハル}りても。塩^{ハル}（五十一ウ）治様は見^{ハル}へませず。ちやつとお出なされませ。イヤ／＼そんなら宿坊^{しゆくぼう}でお宴^{さむらい}。自^ミラもそこへいこ。そなた衆^{しゆ}はまあ先^{ハル}へ。早^ウふ／＼と腰元^{ハル}を見送りかへしナフ姉様^{あねさま}。今の文にて御^ウなんぎを一時^{ハル}もはやふ御救^{すく}ひ。さらばといへば侍従^{しじゆう}は引留^{そと}。龜相^{きさう}な今の文はいの。ハアテお前^{まへ}が持^テて、ある。何^{ナニ}の隠^{かく}そふ取^{トル}りはせぬ。お前^{まへ}もしらずか。そこにもないか。是^{コノ}はとうろたへあたりを尋^ウね。互^ウに探^{さぐ}る袖袂^{そで}。姉^{あね}はびつくり妹^{いもうと}はあきれ。只^{ただ}立^タちはく計^{けい}也。幕^{まく}の内成^{うちなり}塩^{ハル}治判官。しづ／＼と立出れば。ハット貞^ウよが驚^{おどろ}く体。姉^{あね}もそれぞと気味わるく。二人は疵持^{きずもち}ツ足^{あし}よりも。手持^{フシ}チぶさたに見^ミへにける。

貞^ウよ御前^{ごぜん}はあしやくして。扱^ツもいつの（五十二オ）まに爰^{こゝ}へお出。奥の院にも見^ミへませず。今もお噂^{うわさ}申^{マウ}シたが。何^{ナニ}にも聞^ウはなされぬかと。じつと目色^{めいろ}を窺^{うかが}へば。塩^{ハル}治は顔^{かほ}をねじ廻^{マワ}し。連^{つれ}そふ夫^{そふ}の塩^{ハル}治判官。いづくに有^{アル}共^{ども}しらずして。花見の人の多^{おほ}き中^{ちゆう}。あやしき女^をとつぶやきさ、やき。桜花^{おうか}には目^めもやらず。無^む風雅^{ふうが}無^む骨^{こつ}の女^をやとそちが恥辱^{ちじよく}は夫^{そふ}の恥^ち。必^{かならず}塩^{ハル}治が名^なをよごすな。最前^{さいぜん}より風^{かぜ}にふかれて詠^よメし所。あら心^{こころ}なの山風^{さんふう}や。ハレあはてたる気色^{きしき}やと。心^{こころ}を配^{くば}る眼^{まなこ}ざし。座^ざしたるふぜい只^{ただ}ならず。

姉^{あね}も妹^{いもうと}もひや／＼と。氣遣^{きで}いはれぬ大事^{だいじ}の場^ば。貞^ウよは頼^{たの}みきげん取^{トル}り。ほんにそれ／＼。お呵^あは御尤^ご。あの占^{うらな}ひが面白^{おもしろ}さに。こ、へお出^デのことさへしらず。（五十二ウ）我身^{わがみ}ながらも氣^きの付^ツめ是^{コノ}なとめせと櫛櫛^{うしうし}を。脱^{めく}間^まも胸^{むね}はときめきて。心後^{うしろこころ}に立廻^{たちまわ}り。姉^{あね}と見^ミ合^あす顔^{かほ}の色^{いろ}。赤地^{せち}の小袖^{せうそで}きせかくれば。急度^{きゅうど}見^ミ上^ある夫^その顔^{かほ}。目^めのすはる程^{ほど}兄弟^{けいだい}がふるひ出^デすこそせうしなれ。

詞
コリヤなんじや。あく迄着たる花見の小袖。風は吹ケ共塩冶は動ぜぬ。さなきだに重きが上の小夜衣。我夫ならぬ夫な重ね
そ。必夫は重ねそと聞て貞よが胸は板。なむ三宝と思ひしが。元来かくごと心を定め。夫の前に立ちなをり。よめりしてよ
り三とせの間。卒に一日御きげんのそこねしこともなかりしに。けふ御立腹の詞のはし。扱は様子を御存じやの。責て一
ごん云い分けをと。(五十三才) いふをいはずねぢふせて。打チかけかなぐりしなへ打チ。姉は見かねて暫くと。よるを一
所にたゝきふせ。貞よ御前をハツタとねめ付ケ。云いわけとはなんのこと。三ノ日以前某が物陰にてみる共しらず。筆慰みに
書キ付ケし小夜衣の五文字か。それは塩冶より外に夫は重ねぬと云かへ詞。しれたことをいひちらし。夫の一ぶん捨さする。
イヤサ心にとふてみよ。禁庭より賜りし夜のむつごとに馴そめて。並大抵のふうふでない。一たん己レが思ひ込し。夫の外
に不義有ては。日比の情が皆むだこと。心を引いてみんなに。けふ伴ひし花見の場所。俗姓は誰レにもせよ。賤しき女の占
ひさん。此判官がきらひ物。(五十三才) 何か様子はしらね共長物語りのふぜいをみて。ぞつこんあいそが尽果たり。三年
そふての上なれば勅定も背かぬ道理。向後夫婦の縁切つた。占方共に立て行ケと。引ッ立テ突はなせば。二人は嬉しく心へ
ず。夜明ケにくもるこゝちして。貞よの前は又立より。其お詞は聞所。占イ算が嫌ひとは今迄ついに聞ぬこと。様子を
知てのお暇ならば。夫の情と思へ共。外に見落し疑ひあらば。云い訳せねば義理立ず。誠のとがをきゝませふと。せりかけら
れて判官は子細をとつくと知りながら。それぞといへば武士立ず。猶予の体をサアくと。問詰られてサアそれは。最前吹
たる大風故。テモ扱も無(五十四才) 理計。風の吹たがなんでとが。イヤテいせぬよつく聞ケ。風は百病の長といへり。
風にあたつて窺ふ某。汝等が咄シの風も。五体に入て心を病。今更着せる小夜衣。そでに思ふは常のこと。年来さりた

く。思ふ矢壺やづばの山風は。夫婦の中をあらしのが。二世の機縁きえんを吹フ切キッて占ウひさんに渡すからは。此塩冶しんごにはかまひなし。いつく地色ワへ成ナリとも中人なひとして。慥つにほうびをもらはずば。兩人が身は立たッまい。其後は己おの等が心の内に有ふこと。合点ごてんがいたか吞の込みマぬか。馬のみに風なり共。よく聞分きりケて同道せよ。そち達が身の上を。吹フて廻まりし風うけて。是がさらずにゐらりやうか。去サリとてはよいさり時。不届キ（五十四ウ）至極の女原。立たッてうせふと云イひはなす。詞ハルにふくむ無量むりやうの情兄弟今こそ心を悟さと。お礼は儘ぬ有がたさ。枕まくらはさぬ縁ながら。別わかれになれば涙なみだの貞まことよ。姉も御おんは忘れじと共に打ウ連つもふおさらば。さらばと行ウクを呼よべ。幕まくの内にて認しため置キたる去状と。開ひらきながらに打付うちケられ。兄弟見るより驚おどき顔かほ。ヤア詞是は最前尋ねし文と。いはんとするをやレ。其状よむと命がない。しらべかへせば我恥辱。風の吹込フ幕の内。ちらし書キ成ル其去状。己おのレが手に納いなば。いづれの夫にあはふ共。心の内がさつはりせん。早く同道ゆけく。心の内地ハルの暇いとまひ乞こ貞まことよはハツト押おいたゞき。姉諸共あねもろともにふし（五十五オ）拝かみなごりの外のなごりをおしみ。今迄義理の夫婦中。縁を桜の花の雪嬉うし涙なみだのみぞれしてしほれ。別わかれて三重さんじゆうへ出て行。

心地ハルをば糸につないで其中に。言とかきし恋の字を忘れかねたる。横恋慕よこれんぼ。高かうノ武蔵ノ守師直。塩冶が妻を恋したひ忍ハルぶ思おもひのほにお出る。いなやの返事かた思おもひいかで結むすぶの上やしき。侍従しやくじゆう遅おそしと未明みめいより。心フシを碎くだ計けい也。俄にわかに案内云いひ入いる。お使者しやの声は主人直義たうしの名代なしろ渕辺伊賀ノ守景忠かけただ。執権しつけんといひ御前ごぜんよし虚病きよびやうもならず師直しちくは。ぜひなく表おもてに。出向しゆかうふ。相役さうやくながら使者しやの法。御免ごめんと断ことわり。上座じやうざに座まし。此度主君直義大望たうしの（五十五ウ）おぼし立。軍勢ぐんせいの催促さいそく近々に有べき所。西国北国さいこくほくこくの大名。大半みかたに付きケんと貴殿きでんの請合きがひ。それ故思はず延引。然るに十日余り出しッ仕しもなく。有無うむの返答へんたうなきによつて。某

に参り承はつて来れとの御意。いかゞ召されしと尋ぬれば。師直謹而。先以お使者の役御太儀千万。扱仰付られし味方の大名。山名薬師寺桃ノ井大平。かれ是大名十人余り。みかたに招き候へ共。心がゝりは塩冶判官。西国のおさへとして在京。某方便を以て大かたは手に入れたれ共。けふのあすのと申し連判を滞る。今五七日も御待候はゞ吉左右を申し上ん。宜敷御さたとあし(五十六才)らへば。伊賀ノ守横手を打ち。重畳く天晴の働き。しかしこゝに一大事あり。主君直義。將軍職の編旨なくては朝敵とよばれ。ぐんぜい催促思ひもよらず。此編旨は。右大臣具親公と密々の御契約。かの塩冶が女房貞よさへ渡せば。早速願ひ叶へ共心に任せず。それ故今日不意に押よせ。無体にうばおふと云も有り。いやく密にと云も有り。取りしめもなき評議まちく。貴殿のしあんはどふがよかるふ。心底を聞されよと。思ひ有ル身に尋られ。師直ほつと溜息つき。されば其義はどふがな。サアそれは。なんとくと詰かけられ。ハツト計にさしうつつふき。とかふ(五十六才)返事もなかりける。

伊賀ノ守腹を立テ。か程のことにさへ当惑する師直。一大事の相談には思ひもよらず。あつたら足をついやして分別をかりにきた。近比心外くと。立てかへるを師直驚き。やれ待チ給へ測辺殿。しあん有りとよびかけられ。元よりちゑの才覚にきかゝつたる不足者。どふじやくと立ちもどる。さし当つたる師直が。詞で廻す一寸のばし。ナフ幸イ有リ。某がけらい榎原藤内。貞よ姫が。としたしき中。花見遊山をすゝめさせ。そびき出してひつたくるが上分別。万二押しよせてうばひとらば。都のさうどう天子へ恐れ。忍びを入るは猶あぶなし。右のしあんは(五十七才)いかゞぞと。口をむしれば尤。しかし氣ばやき主人。まどろしきなど、おしかりは有ルまいか。サアそこは貴殿の取りなし。今の世の御出ツ頭。はからひ

給へとのせられて。いかさま某。鹿をみせ馬と申さば馬に成ル。牛にはならぬもうお暇。はやお帰りか首尾宜敷ク。お使者御苦労。ごくどうと。口と心の二タことを。胸にこめたるけんつるぎ。身うちは針の伊賀ノ守。立ちわかれてぞ帰りける。

跡には師直心も空に表を詠め。去ルにても此侍従きのふ過きてけふの約束。もし道にてうばはれはせぬか。卯の刻よりおつ立テし使イも帰らず。刻限ははや五ツ六ツかしの恋路や情なき世の中やと。(五十七ウ) 時にとつては小ばらも辰の上刻過キ。侍チに侍たる折からに。榎原藤内立降り。仰に任せ侍従を迎ひに参りし所。貞よ御前と打つれしを河原面テに出合し。兩人

共に乗物にのせ。只今はへといふにぞく。年月の物思ひ今日はらすはいか成ル日ぞ。まれ人への饗応に名香の用意くと云渡し。ゑりつくるひて。待ゐたり。いざこなたへと聞クさへも。憂にはそりし貞よ姫。姉の侍従に敬はれ。心ぐるしき身の上にしたふ夫はいづく共行衛なぎさの捨小船かひなき命ながらへて。姉のなんぎを救はんと。しほくとして。あゆみくる。

侍従がかくとしらすれば。心ときめき師(五十八オ)直は。貞よ御前を見るよりも。大の眼をまぶたでおさへ。見初し日よりいつかはと。恋の瀬戸ぎはこぎぬけて。今なびきよる湊入り。侍従が楫の取りさばき。天晴できた。貞よの返事に。小夜衣とか、れしは。夜の物を改めて拵へ置ケとのことならんと。薰衣香を燻しめて。待設たる心ざし。にくふはあらじコレ君と。坂東声を無体にほそめ。恋に心の師直が。ぬれかくるこそ見ぐるしき。

貞よ御前はうたてさを包むゑがほにゑしやくして。お心ざしが嬉しさに。塩治殿と縁を切り外に頼まなかたもなし。文の詞に違ひなう二世迄そふて給はれと。口にはいへど心には。しぬるかくごを(五十八ウ)押つ、むうき身の。程こそせつなけ

れ。

師直地色ハル聞より五体をぢめ。さりとて身節ふじがとけて行ウクイザしつほりと奥の間で。サア来給へと手を取りて。行んとするを侍従は引キとめ。きつしくなことながらこつちにも待兼る。約束やくそくの佐中殿引かへにして下さんせ。誠にそれよとざしきに向まむひ。ヤア詞く和氣けの佐中。女房が手がらにより命を助くる是へくと。よばれて出る無念中さを。色にも出さずしほくとさフシしうつ。ふいて立ち出る。侍従地ハルは見るより走りより。なふこちの人。ヤア女房。無事であつたか。嬉しやまめでござつたかと。懐キ付上せりかけてかたるも。とふも涙也。貞地中よ姫も(五十九才)外ならず共に悦ハルぶ其中に。佐中と顔を見合せて。ヤアお前は我つま。衛士ゑじの源次郎殿。ナフなつかしや恋しやと。すがり付けば佐中地ハルもびつくり。あきれて立ウし武藏ノ守。侍従も真貞まに。コレ貞色よ殿。よいかげんな籠相そさうおつしやれ。コリヤ和氣の佐中とて。私が為に大事の夫。さはつても下さんなど。いはれてクハツト貞ウよ姫。後先あと思はずせきのほし。コレ姉様。どんなこといはしやんすな。コリヤ自自ラがいたい男。衛士地ウの源次郎康綱やまつな殿とて。五節の夜契りし夫。さまぐのうき思ひも此人にそひたいから。めつたに傍そばへよらしやんすな。ヤア妹。そんならそなた(五十九ウ)の夫も佐中殿か。お前の殿御も康綱殿。ハレめんようと兄弟が。心置キあふ目色の違ちがひ。佐中地色フはほつと吐息といきつき。二人が為に優曇華うとんげの花もしほみしごとく也。思地色フひよらねば師直ウは。怒いかれる眼に三人を。見廻みへしくふしん顔中。貞ウよと侍従ちじうが兄弟とは心ハルへね共追ともてのせんぎ。佐中詞は以前康綱とて密通みつの男とな。今でも心残るやいなや。返答聞んと詰はかる。ア、りやうじ有ルな暫しばらくく。成程拙者は。衛士ゑじの源次郎康綱と申ス者。三年いぜん貞ウよ殿と契りし覚あれ共。今睦むつまじき女房を置キ。外に心は残らずと。聞地色中いて侍従は落

付ケ共貞よ（六十才）御前は角芽立チイ、ヤそふはいはせぬく。未来迄も夫婦ぞと云いかはした忍び寝。今更心残らぬとは。ソリヤひきやうな未練なと。よらんとするを。突飛し。武蔵ノ守の御前にて僥忽成ルことながら。此源次郎康綱を。さ程にしたふ心あらば。なぜ此屋敷へ来られしぞ。眼前しれたる不義の徒。此云い訳はさあなんと、詰よせられてちつ共さはがず。其疑ひは御尤。かふ成ルからは何もかも打明す。もと自らは。和氣の伴良と云医者いしやの娘。わらの上より大なごん通兼様にもらはれし。慥なせうこ有ル故に。姉様と兄弟の名乗リ合あひ。其上で佐中殿を助けたし。師直殿へいて（六十ウ）たもとのつひきならぬ頼み故。わしやじがいするかくごして。此屋敷へ参りしぞや。塩冶殿に枕をかさはさず。こなたへ心中を立テぬいて。心を尽せし自ラに情らしい詞もなく。姉様を女房とはお前の為には小姑。勿体ないとはおぼさずや。どうよくな康綱殿。うらめしの我夫やと。畳をたゝき氣をもみ上ケ。あつき涙や玉の汗。湯あがりを見るごとくにて。泣きさげぶこそわりなけれ。

聞クに師直腹にすへかね。兩人を討チにと刀の柄に手をかけしが。思ひなをしてさあらぬ体。ヤア康綱。貞よに心残らずは。某に随ふやう汝とくと云いふくめ。もし違背せば首打ッて見せよ。未練の働はたらき（六十一才）致しなば。三人共に命の極め。なんとくと云い付ケられ。心にそまねどハツツ領掌請あふてい。師直指ぞへ投出し。それにて打テと云い渡しにらみへ付ケてぞ入リにける。

康綱いと十方にくれ。どうど座してもくねんと。しあんの内も侍従はせき立テ。コレナフしあん所じやない。貞よの心はあの通り。かた時もこゝにはゐられぬ。サアござんせとすゝむるを。貞よ御前は引とめ。エ、心づよい姉様。こな様のお

頼み故此屋敷へ入り込しに。わしひとりを残し置キ立のこふとはどうよくと。恨歎けば姉も氣ノ毒。さふいやれば尤ながら。こゝへそなたを入りこまし。佐中殿さへ助けなば。こよひの内に夫婦して。盗出す約束も。(六十一ウ)かう成り下ればぜひがない。此上にも相談は佐中殿を姉がいに。わしへ譲つてたもらぬか。イヤく思ひもよらぬこと。譲る物も多からふに。男をなんの譲りましよ。命を捨てきたからは姉がいは立テました。こつちがせんの約束なれば。康綱殿はもらひます。それ共にいやならば夫にはかへられぬ。姉様命が有ルまいと。おどしの懐劍ぬき放せば。姉も用意の刃を拔。ヲ、面白いよふいふた。妹ひくな。姉様やらぬと。よらんとするを康綱が。引はなつてはつたとねめ付ケ。兄弟が真実の親。和氣の伴良を討ッたるは。近藤太郎春久とや。親の敵を持ちながら。犬死をするうろたへ者。(六十二オ)貞よ御前は勿論。侍従夫婦の縁切ふか。サアくなんと、きめ付ケられ。ハツトしはれし有さまを。見るに夫が心もたゆみ。夫婦兄弟身を恨み。ならぶ因果の三ツ鉄輪。離れぬ縁をかこち泣キ共に。涙を催せり。門前にあはた、數ク白砂蹴立て鎧武者。息をはかりにかけ来り。伊賀ノ守が郎等に高沢次郎照宗。師直公に御意得たしと。声の内より武蔵ノ守何ごと成ルぞとかけ出る。さん候主人景忠。最前へ参りし跡。直義朝臣の御謀ひ。塩冶判官むほんのよし。讒奏首尾能ク事調ひ。塩冶が屋敷へ押よせ給ひ。俄の戦ひみかたの勝利。塩冶は雲州へ落たり(六十二ウ)共。又討死共実否はしれず。それ故主人も鎧投げ軍場へ罷越シ。貴公内談ありしこと申上るいとまなし。此旨おしらせ申せよと某をこされたり。はやおいとまと云い捨て。いつさんにこそ走り行ク。聞て驚く其中に康綱は身繕ひ。かけ出す夫に付ク兄弟。師直見るよりヤアまてく。腰ぬけの公家侍イ申付ケたる返事もなく。逃ればとて逃さふかとまれやつとぞ声かけたり。イヤ逃るとは寵忽の詞。是より直に禁庭へ案内し。塩冶判官

謀反とは直義が讒言と。ありのまゝに申シ上此源次郎康綱が。再天子へ仕をなす。云、いぶん有ルやといふにおど（六十三オ）ろき怒の面色。ヤア思しらずの人外め。とくに殺す奴なれ共。情を以て助けしに。主君直義の惡逆奏聞せんとは。訴人のほうびに官禄を望むか。さすがは庸医者衛士ぐらゐに似よつた根性。鳥獸はゑばにかゝり。下男は欲に命をはたす。いで師直がだんびら物。ほうびにくれんと拔はなす。康綱すかさず飛すさり。一たんの恩あればこそおんびんでかへる某。其惡口を聞からは遁さぬかくごと切りかくる。さしつたりと受ながし。上段下段の太刀音刀音。二人の女はくはいけん拔持チ。師直めがけて心はやたけ。日本不双の高ノ師直。みせい眼力めいよの勇士。（六十三ウ）此方も名にあふ手だれの上手。しばしたゝかふ其内に。康綱が太刀打ちおとされ。たゞよふ所を武藏ノ守。あばらをはつしと切り付ケたり。二人の女ははつと驚き。其場を引クなとかけ隔て。男まさりの九寸五分。刃むかひよるを康綱声かけ。ヤレ兩人あやうしく。多勢の出合ぬさき此場をはやく立ちのけく。いやくお手疵がふかいを。見捨ていづくへ行クものぞ。師直やらぬと詰かくる。武藏ノ守せえ笑ひ。下郎は臆病を先キだて。勇者は計を恐るゝといふ。文武に名を得し高ノ師直。女ンなどに眼はかけず。家来共を恐れず共。心静に（六十四オ）なごりをおし。くたばれやつとぞ大やうなる。康綱たまらずよろほひ指より。ヤアすいさん成ル過言。是主有ル女をうばひ。主の惡事を諫もせず。文武に名を得しとはかた腹いたき長ぼゑ。誠某を庸医者衛士とおもふか。塩冶判官高貞が弟。四郎左衛門ノ尉高則と云者。せめて己が首を取り。兄塩冶が恨をはらさんと思ひしに。仕そんじたか無念やと。齒をくひしはり身をふるひ。五たいを膝にておし出しく。にらみ付ケたる目の内に涙を。うかめいかるにぞ。二人の女は本名を初めて聞て驚ど。けはしき場所とさしひかへ。口をと

ち(六十四ウ)てぞゐたりける。

師直地色ハルもふしぎ中の思詞ひ。何塩治地色ハルが弟四郎左衛門とや。然らば何故い医者の風体ふうてい。貞よ姫と契りしはいかに。ヲ其いひ分ハけは女房

へとねぢなをり。去ル比五節の舞有し時。某部屋住ずみにて見しられぬを幸イ。衛士にまぎれ入り込しに。是成ル貞よしの、めと

いひし時。ふしぎにかりの情。跡のとがめを恐れ。衛士の源次郎康綱となのりしは。当座に出合の作り名。其後兄塩治へ貞

よ姫を下され。祝言の夜密ひそかに聞きケば。夫有ル身と断ことわり。たて枕をかはさぬ心シ底。此家このにあつては兄塩治の為ならずと。勘当

のたねをこしらへ。追出ハルされたは(六十五オ)三年以前。それより方々ウうろたへ。縁をもとめ侍従が方へ入色リ。貞詞よと兄

弟とは夢にもしらず。秘伝ひでんの医書いしょを学まなび。多くの病びやう苦くを救すくひし内。直義が難病。きやつ悪人とは思ひもよらず。本復ほんふくさせ

しは榮花ウのもと。出世ハルのたねと思ひあるとあらね手ウがら咄はし。我身わみをはたすとしらざりし。医いの道は人を助け。病苦びんくをす

くふを手がらとす。我地中は薬料やくりやうをむさぼつて一味ハルかげんの配剂はいざいに。ごみをにごして世を渡る。其咎とがゆるさぬさじのばち。兄

塩治迄亡上びしとはよく兄弟かく迄に。武運ぶうんにつきし口おしやと。(六十五ウ)いかりてはなき泣ナいてはいかり。はらり

くウと両眼ウより。ながす涙の玉すだれ。糸いとをみだきしキンごとくにてともに。あはれをもよほせり。

侍従地色ハルはとかふなきたをれ。自ウラ不義の媒なかだち。もお命が助けたさ。兄弟かく迄氣をくだく。其かひもなき此すがた。かなしうな

いか妹。おりやもろ共に死たいとくどきなげ、ば貞中よ姫。おろかの仰おほせや我レこそは。死ハルにきた身のおそなはり。詞ウをか

す恥かしや。徒ウでないいいわけに。死ぬるかくごと取詞ルつるぎ。ヲ、そふじやく。ながらへて何かせんイサこい妹。

あねさま地ハルござれと取り付キて。(六十六オ)さしちがへんとする所を。師直かけより剣もぎとりつきはなし。高則たかのりがそばちか

くどつかと座してかほ詠め。貴殿塩冶とは腹がはりの兄弟。妾宮路が子ならん。もし母より譲りし物はなきか。つゝ、まずいへととひかくる。ムウふしぎの尋ね。塩冶とは子細ある兄弟。母さいこの時分譲られしかたみ。肌身もはなさず是にあり。尋ぬる汝は何ゆへと。聞て師直ヲ、其筈。其かたみといふは釈迦の絵像。則梁の武帝の筆。ちがひはせまいといふに驚き。やあら心へず。其絵像は兄塩冶へもふかく（六十六ウ）つゝ、み。かた時はなさぬ秘藏。汝くはしくしつたるは。いか成ル故とけでんがほ。ホ、驚き尤々。もと汝が母宮路といふは。某が為には伯母。父師方の妹。わかき時分仏法に帰依し。其釈迦の絵像幾度か望まれしか共。もろかた秘藏してはなされず。ある夜ぬすみ出し国遠せられし其のち。あるものゝ語るに雲州塩冶庄司。高秋が方に妾奉公。一子迄もふけしと伝へ聞ク。されども盜賊家出の咎を恐れ。ふかく忍ぶと聞しゆへ。しらぬふりにて中ぜつ。とはいへ現在お身と某は徒弟。とくに名（六十七オ）乗らばうちもせまいうたれもせまい。一家といひ徒弟といひあつたらしき侍に。手を負せたる残念と。初めてながす一トしづく。侍従貞よもうちしほれ。涙を袖におしかくす。高則いらつて。ヤアいよくのひやうり者。おのれさ程の縁あらば。貞よをめとりあまつさへ。直義に塩冶が家を退転させしはいかに。さあ此いひわけなんとく。ヲ汝しらずや。右大臣具親貞よ姫に心をかけ。うばひ来らば將軍職の綱旨をなさんと。主人直義と内談。そばには佞人伊賀ノ守す、め上る悪逆。某が諫言も（六十七ウ）とゞかず。とかく此女をいたづら者にしそれがしが手にいらば。將軍職の望みもかなはず。おのづから悪ぎやくもやむ道理。いかゞはせんと思ふおりから。侍従が命ごひ。仕そんずまじき女と見こみ。のつひきさせぬ命のかすがひ。なかだちは仕おほせたれ共。勇將短慮の直義。最前おしよせ。亡びたること夢にもしらず。夫木集の撰者たる此師直。小夜衣をしらぬといひなし骨の

名をとり。末代記録にとゞまるも天下のため主君の爲。塩冶も仁義の武士と聞ク。四方八方(六十八才)一心に。おさめ過きたる師直が。不義一たうにおち入て。非道のかゝみとなることは。まりしその御はち共。弓矢のみやうがにつきし共。たとへがたなき身のうへを。あはれんでたへ高則殿。二人の女中も胸はらし。ふびんとおもふて給はれと。勇氣にはやる師直が。一鉄なみだ雷のひやうをふらすがごとくなり。

侍従貞良もいたはしと思ひながらもことはをそろへ。さ程みち有ルさふらひが高則殿をよびかけて。きり付けたは聞へぬ。ヲ、それも道理。とくに名乗り給はゞ何しにうたん。直義公の(六十八才)御ぜんにて。医者の有ルまじきりやう治自慢。又候や一大事を聞。天子へうつたへんとかけ出す心底。きやつ下郎にきはまりしと。見こみしが高則の不運。おもへば塩冶がほろびたと聞キ。かけ出すに咎はない者。忠義一ッへんを思ひ。はやまつたことした女中。従弟は遠いやうなれど。親とおやとは兄弟の。中に生るゝ血のすぢは兄弟よりもしたしいと。いひつたえたるかひもなく。手にかけては何ごとぞ。ゆるしておくりやれ高則と。すぎりなげゝ一同にワツトばかりになきしづむ。高則涙を(六十九才)おさへ。仁義忠臣の武士ともしらず。ぞんぐはい申せしまつひらく。御心底聞た上返弁の物ありと。彼絵像取り出し。それがしたゞ今相果ればもつてゑきなし。一つは母が未来のつみ。うけ取つてとなげ出し。こりやく兩人。かならず師直殿にうらみはなきぞ。親のかたきもつたる兄弟。命まつたふし本望をとげよ。いかさまうすき契りふしぎの縁であつたよな。師直殿もふおいとま女房さらば。貞姫。みらいであをふといふよりはやく。そば成ルかたなおつとつて腹にくつとつき立る。(六十九才)是はとおどろき兄弟が。あせれば師直走りより。とても助からぬとおもひ切腹とは武士の本意。ハア、でかされたりみごと

く。ひきまはさぬうち未来へみやげ。これ見給へとかほよのたぶさひつつかみ。遠慮もなくふつ、と切りとり。すぐ敷きこゝろに残るはあいじやく。某まことの不義にあらずと。舎兄塩治貴殿へのいひわけ。ヲ御念が入ッてくはぶんく。ナフわれとてもおくれじと。侍従もたぶさきりはらへば。あなたこなたを見廻して。高則はうれしげに。まことある兄弟。頼むは(七十才)後世のことばかり。ふたりの外に誰しとてか。とむらふ人もなき身のうへ。朝夕のいとまには香花とつて一へんの。ゑかうをなしてくれよかし。師直殿にはなきからの。見ぐるしうないやう。さらばでござるおさらはと。手はふるへ共引廻す。刃で留る息の根はおしむかひなくたへにけり。

兄弟ワットなきたをれ友に乱れて師直も。伏沈しが心付き。我レ取り乱さば兄弟の。歎きは尽じと押のけく。さんげに仏果の高則へ涙かけるはみらいの迷ひ。敵討ツ身の歎くは不吉是より直に旅出立。たそかれ時の折りもよし。時節もよしと(七十才)いさめられ。せんかたなく兄弟は。つまのなきからよきにとて。頼む心の世捨人。便りずくなき足どりに。力を付ケんと武蔵ノ守。やあく兩人。幸イ門出の引出物有り合せしを送らんと。彼絵像取り出し。一旦高則の手にありしを。我手に置クはうしろぎたなく心にかゝる。兩人仏ケの道に入りみらいのゑんをむすばれよと。釈迦の絵像をふたりへ渡し。かたきをうつはしやばの行。仏ケを頼むはみらいの行。しやばとめいどを一腹一生。兄弟いたゞくたまものは有りがたし共々ぐれに。行末とても頼みなき身の(七十一才)うへ何と成ルべきと。思ひこがる、りんゑのきづな。師直しがいを押かくし仏ケの縁にあふからは。しやば即寂光喜見城御法をひけやとす、められ。げにことはりや釈尊も有滅不滅ととき給ひ。ここにあれども目に見へず夫の魂も身にそひて。有ルとおもへば有リ明ケの月の入りしほくろかみも。先キ立ツつまの手向ぐさ

草葉^{中キ}のかげも一連^{れん}たくしやう。誰^たが身の上もうき草^ウの。いつ迄^ウこゝに根なし草^{ハル}。蚊屋^{かや}つり草^{なつ}の夏^{あき}すぎて。秋^{あき}かへりこん村時^{ハル}雨袖^{ハル}に。かくして兄弟はなくく。都^ウをたち^ウにける(七十一ウ)

第四 道行絹^{きぬ}かつら

よさ^{哥ハル}こひと。いふ字^中をきん^ウしやで。ぬはせ。すそにふたりがねた所^ウすそに。ふたりがねた所^ウエチトくはん。くはんじんびく^{ハルフシ}にの。うたしやうが。侍従^中貞^{ぢじう}よは覚^ウがき一つ二つを口^ウのはに。かゝる姿^ウのあゆみぶり。だてにはすはにしやんとした取^ウり。かはるきのふけふあさぎのひもをかぎ笠^{ハルフシ}に。しめくゝりなき。丸木橋^{ウキハシ}。ふみもならはぬかちはだし。しゆすのほうしのつとなしに。くし^中のはいれぬびんざゝら。是^{ホシ}を百八^{ハル}ぼんなうの。じゆずとつまぐり心^中には。しやうみやうおこたる(七十二オ)こともなく。又^中ある時はびく^ウにうたつて。うたへば旅人^ウのゆきつもどりつ立^ウちとまり。見^ウかへる程^ウのふうぞくは。色^{フシ}も有^{ハル}やと思^{ハル}ふらん。

ア、うたてやな世^{ハル}の中^中の。色^{長蛇}といふ字^ウにあきはて、兄弟^ウ諸^{もろ}共^ウうきよのひま明^ウけて出るや九重^{このへ}の。さかりの花^ウも見^ウずしらぬ。敵^{ハルフシ}の国^{ハル}は。いづく共^中。思^ウひも。わかぬあづまちや心^ウのしんくふさのいと。九万九千^{フシ}のく^{ハル}のせかい。此身^中に二つにとゞまるとかぞへ。く^{ハル}て。はてしなき。みちにさまよひこゝかしこ。泣^{フシ}いてへゆくこそ。あはれなれ。誰^{スエテハル}に大津^ウのうらのなみ。

見^ウへつかくれつ一トかすみ。せゝにとびかふいそ千鳥^ウ。いそのみるめを(七十二ウ)かる草津^ウ。むかし用明天王^{ようめい}は玉世^ウの姫^ウを恋^ウわびて。さんろが草^ウかりぶゑとて。世^ウのことわざに。成給^{フシ}ふも。恋^ウゆへにてはあらざるや。我^{ハルフシ}も色故^{ハル}。此^中すがた。人^ウの目川^ウをしのぶぐさみだれさきなる梅^ウの木^ウに。花^ウともみぢの小むすめなれど。ほれてほのじもしらぬやら。心詞^ウもいしべとや。

恋しらぬこそ仏ケなれしハればうき名をながすのみ。みなくちのはにのりかけの。馬子のうたにかたたづな坂はてるハ。
すゝかはくもるあひのつちやま。是とかや足ハよはづれのはかどらぬ。心あくせきせきがはをわたり（七十三才）くらべて今
ぞしる。やもめ哥ずみなる。おし鳥やさしハほんにやさし。つま鳥こがれて尋るか。よぢらすハく。くどつこいよぢらすく。
はねをよぢらすこがれはや。はやるりくはうの。いしやくし神にいのりをかけおびの。むすびしゑんもあだしの。露とき
ゑにし其人の。おもかげなりと見まほしとひとりかこてば妹も。おなじ思ひをおしつゝ、みないてかへらぬ死出の道。つゝむ
にあまる袖涙のべの。ち草も雨やさめ。アレ人々の見とがめんいざこなたへと手を引て。うたへやうたへ一トふしを。わし
はヤアたんぼのゑさしのむすめ。さいてヤア、おめ（七十三才）にかけふヲ、サテノヲ、四十がらをさいて。さいておめに
かけふヲ、サテノヲ、四十がらをからもやまとも色故に。ためしを引クにあらね共祇王祇女が恋衣。我々とてもつまの為。
かたち下はすみに染中メなせど。心中に忘れぬしゆらの道むねに。みちくるつるぎのひかりとき立テ。く付ケねらふ親の敵にめぐ
りあひ。本望ハとげて。其場中にて。そなたしにやらば一所にしなん。それは誠まことか虚うそではないか。扱あも。うれしや姉様と。友
にきゑなんことこそねがへ。早ふござれと小づまを取りて。急ぐ旅路は此世のなごり。あはれはかなき身上のゆくゑみかはの。
国にぞ三重三へ着給ふ（七十四才）
花むらさきの。ゆかりとて。色も一トしほやさ女。簪あじかに鑄こくわ取りそへてあゆみへたゝずみかげうつす。野路の池波さはの水
かゝる吾妻あづまのぬなにも。はすわにだてにかゝへ帯とけてまだねぬ娘とも。里になれにし妻中ぞ共思ひわかたぬ取りなりは。
いかで絵にさへかきつばた。筆のつぼみや咲キかゝる。花のわかなへ根をそへて。取手中もたゆくしほらしき。鑄こくわにすくひ

簀ウに入中ウシしハシばし。みぎはにやすらひて。見渡地中せば風ウにさそへるびんざハル、ら。熊野くまのびくウにのふたりづれ。心ウうかる、声ハル高く。
 き二八三やす三みリナハルなんでもせい。清澄下寺きすすみでらのお所キンしよけ化様キナアヨ上へ。齋ときに上(七十四ウ)出上てナなんでもせい。十六入七入を入ナなんでもせい。十中
 六七ウを見てキンきてナアヨハへ。お経箱ウをなんでもせい。さらりと入な中げてナなんでもせい。さらりとウなキンけてわウざキくれナアヨハへ。
 うたワキナラひつラつシれてぞあゆみくる。

こシテ地色中なたの女ハルは打見あまたちとれ。テモ美うつくしい尼達あまたちの品ウかたウちは都人みそじ。まだ三十ウにもたウらぬ身ウで。恋故しゆぎやうの御修行ウか。同ウじ類なぐひの打揃ハル
 ひ。うきよをしハルやんと何フシもかも。ざんざら柳ハルのざん切ハルりは。おフシしいことやといひければ。ふたりの尼フキ地中は詞ハルをハルそろへつ、むと
 すれどほハルに出中る。尾花おの乱れハルわけ入中りて。さハルとくも推すいし給ハルふハルな朝ウなゆハルふハルな便たづのハル為ハル。哥ハルびくハルにハルとはハル(七十五オ)やつせ
 共ハル。心ウは聖ひじりの旅修行ウ同ウしうきねの美濃みのおハルはり。参河みかわの国ハルと。聞ハルクからに思ハルひ合ハルせし杜若かきつばた。其若苗わかなへを取給ハルふ。そもじは所ハルの
 何人フシにていか成ハル故ハルぞと有ハルりければ。ナウシテ地中ハルいとハルらしい御尋色ね。自詞ラハルこそ八ハルッ橋ハル村花守ハルの喜ハル作ハルが妹しげ。繁ハルと申ハルス女ハル也。実ハルや光ハル
 陰いんとハルまハルらず。春過ハルぬれば夏ハルのきて。草木スエテ心ハルなハルけれ共ハル。時ハルを忘ハルれぬ花ハルの数ハル。一ハルもとにても多ハルければ兄ハル様ハルの誉ハルれとなり。
 岩いはもとがみ本神ハルと祝ハルひたるむかし男ハルのなハルき魂たまも。悦ハルび給ハルふといひ伝ハルふ。それ故日ハルごとに里ハルを出ハル沢ハル辺ハルの杜若ハル。我ハル八ハルッ橋ハルのさハルは水ハルに
 うつしうハルゑ侍ハルへば。色ハルもハルますハル濃紫こキ。(七十五ウ)取ハルわハルき詠ハルめ有ハルぞとよ。誠地色中に深ハルき心ハルばへ其里人ハルと有ハルルハルからは。彼かのありはら在原ハルの
 業平なりはらの吾妻あづま下ハルりの哥枕フシ。猶ハル其跡ハルの。侍ハルふかや。是シテ中フシより道ハルは。程ハル近ハルく。今ハルも残ハルりて在原ハルの思ハルひ渡ハルりし橋ハルの数ハル。やつさで直すくにハルい
 にし中への。記念かたみの花ハルは。さウフシかりハルぞや。聞ハルさへ旅ハルのうハルさハルばらハルしと。草ウの薙むしろを座ハルにかまハルへ其名所ハルのありハルしさハルまハルきハルかまハルほしやと
 尋ハルぬれば。いはシテスエテねどハルしハルらせ給ハルふハルべき。伊勢物語ハルりにハルしハルしたる。むかし男ハルになり平ハルの。住所すみ求もとむとて吾妻ハルのかたハルに行ハルぞらの。

いせやおはりの海面に。立ッ波を見ていとゞしく過にし方の恋しきに。羨うらやましくも帰る波。なみく（七十六オ）